〈世界史〉の圏外と未来——中国とアメリカ

馬場智一

西側の近海を隔てた中国は、日本に文字と大陸の文明をもたらし、東側の大洋を遠く隔てたアメリカは、開国と近代化を迫った。ユーラシア大陸の東端に浮かぶ列島の運命は、二つの大国がその扉を開いた近世と近代二つの「グローバル化」に左右されてきた。中米関係を見極め、両国とどのような外交関係を結ぶかは、日本の行く末に関わる問題である。

これに対する安倍政権の選択は、対米従属の徹底化と中国との対立強化であったが、その基底にある世界観は、冷戦構造を未だに引きずっている。中国は市場経済を取り込み、日本の重要な経済パートナーとなった。しかし、政治的な緊張は高まり続け、中国の経済成長の陰りを喧伝する言説もすでに耳慣れたものになった。日本の政治経済支配層が固執する冷戦的図式の健在ぶりは、この国における知性の危機を物語っている。

こうした図式において、アメリカは世界の未来を走り、中国は過去に位置していることになっている。経済大国第二位の座を奪われ、無人島や領空権で主権を侵害されることは、そのような思考には堪え難いことであろう。アメリカという未来、中国という過去。現在進行中の世界秩序の再編を見極めるためには、このような歴史＝世界観は改めるべきである。ところがこうした思考は、歴史の〈ヨーロッパ化〉のプロセスのなかで近代日本そのものを形成した世界認識であり、簡単に根こぎにできるものではない。

このような認識にとって、冷戦後流行した「歴史の終わり」という観念はなじみ深いものであろう。この発想はしばしばフランシス・フクヤマに帰せられるが、元々はフランスの哲学者アレクサンドル・コジェーヴのヘーゲル解釈に由来する。実際、フクヤマの『歴史の終わり』には、自由主義国家アメリカによる歴史の終焉といった単純な図式は示されていない。ネオコン思想家はむしろ、歴史を動かす原動力である承認欲求が、様々な形での権利要求としてアメリカ国内で現れていること、すなわち承認を巡る闘争が少しも終わっていないことを直視している［フクヤマ 1992: 190–203］。

ではコジェーヴが依拠するヘーゲル自身は中国とアメリカをどう捉えていたのだろうか。ドイツ観

念論の完成者は、歴史の時間軸の両端に両国を置いていた。厳密にいえば中国は歴史の始まり以前にあり、アメリカは歴史の終焉の次に位置する。中米をめぐる冷戦的思考の哲学上のモデルはひとまずはヘーゲルに遡ることができる。

ヘーゲルが一八二二年から三一年にかけてベルリン大学で行ったのが「世界史の哲学」と題された講義である（日本語訳では『歴史哲学』ないし『歴史哲学講義』）。ヨーロッパ（さらにはゲルマン）中心主義的な〈世界史〉の哲学的表現が、この講義である。

世界史は、東洋から始まり、西洋に向かって進む[ヘーゲル 1971 上：218]。ちなみにドイツ語で東洋は「朝の国」（Morgenland）、西洋は「夕の国」（Abendland）という。一日の太陽の運行のごとく、歴史は朝から夕へと進む。東洋は歴史の幼年期、ギリシアは青年期、ローマは成年（壮年）期、ゲルマンは老年期（完全な成熟期）である。

歴史が始まるのは「神政的専制の国、シナと蒙古から」だ[ヘーゲル 1971 上：232]。しかし、「シナ」には弁証法的な変化の契機がなく、歴史の代わりに「停滞」があるだけで、実のところ「世界史の圏外」にある[ヘーゲル 1971 上：238]。これに対しアメリカは「未来の国」である。「そこでは将来の時代において、たとえば南北アメリカの抗争といったような形で、その世界史的な意義が示されることであろう」[ヘーゲル 1971 下：189]。ヘーゲルにとって中国は過去における歴史の外部、アメリカはゲルマンによるヨーロッパ的〈世界史〉完成の翌日の世界である。

ヘーゲルのこの見方は、哲学の歴史にも適用されている。主客未分の「空」を実体とみなす東洋哲学は「哲学史から除かれ」[ヘーゲル 1967: 179]、哲学史の「前座」を務めることになる[ヘーゲル 1967: 207]。「本来の哲学は西洋に始まる」[ヘーゲル 1967: 180]が、その始まりとは、世界史同様ギリシアである。

「哲学」という漢語はギリシア語のフィロソフィア（愛知）に由来し、ギリシアから始まる、という認識は今日では常識と化している。しかし、これはいわゆる「伝統の発明」（ホブズボウム）の一種である。その発明は実のところヘーゲルの独創ではなく、カントに遡る。

カント自身はその哲学史的な知識を、啓蒙時代の哲学史を代表するブルッカーの『哲学の批判的歴史』（一七六六～六七年）に負っている。しかし本書においてはギリシア中心主義的な視点はいまだ見られない。むしろ、「旧約聖書、イスラム、中国、さらには日本など」も含まれている[福谷

2009: 41]。カントは、四〇年にわたって講じた哲学史講義で次第に取捨選択を行い、最終的に哲学はギリシアに始まるという、今日ではもはや疑われることのない大前提を構築するに至った。「学」(Wissenschaft) としての哲学を概念として形成するにあたり、エジプト人の「暗中模索」からギリシア人における「革命」への移行という発想が、こうしたカントの選択を導く歴史像となったようである。カントによる哲学ギリシア起源論は、ヘーゲルまでにはかなりの程度受け入れられていた [福谷 2009: 42–43]。

哲学史におけるギリシアという「伝統の発明」は、その論理的帰結として「中国」を排除することになる (他方、この時代アメリカではまだプラグマティズムは生まれていない)。ではカントがその背景としていたブルッカーの哲学史は、ヨーロッパ中心主義的な観点を含まない、より「公平な」記述を心がけていたのだろうか。

フランスの哲学史家のエミール・ブレイエ[2]は、ブルッカーの哲学史を、アウグスティヌスの『神の国』以来の神学的な枠組みに留まるものであると評している [福谷 2009: 41]。哲学がギリシア起源であるという「伝統」の発明は、その背景として〈世界史〉という発明を前提にしている。そして〈世界史〉という観念は、その神学的基盤に立脚している。

西谷修が詳述しているように、〈世界史〉という発想自体が、創造から終末までを包み込むキリスト教的「普遍史」を世俗化したものに他ならない [西谷 2000: 72–86]。一つの中心をもつ線上的な時間性という神学的構造を保持しながら、歴史の主体は〈ヨーロッパ〉が担い続けている。ブルッカーの哲学史がすべてを含もうとしているのは、それが〈世界史〉の使命であるからだ。〈世界史〉がすべてを呑み込んだ後、そこにどのような線引きをするかは、各々の国民国家が抱える必要性に委ねられている。

〈ヨーロッパ〉により形成された〈世界史〉とそれを下支えする各国史という、従来の枠組みを解体する歴史学上の潮流が「グローバル・ヒストリー」として広がりつつある [水島 2010; 羽田 2011]。このまだ未規定な〈歴史〉のなかにアメリカと中国を改めて位置づけ直す作業も進んでいる。一方では、内部に多様な支配のグラデーションを有した中国の「帝国性」があらためて注目され、他方でアメリカ「帝国主義」の終焉論が台頭している。〈ヨーロッパ〉の未来として想像され、〈歴史〉の終焉として到来したアメリカの現状が示しているのは、〈世界史〉という概念そのものの黄昏であろう。しかし、新たな世界史を再び

一元論的なものとしないためには、〈世界史〉の歴史性についての究明がその重要性を一層増すことになる［羽田 2011: 193–195］。中国とアメリカについての理解の変化は、ヨーロッパ中心主義的な〈世界史〉からの隔たりを示す一つの重要な指標になろう。

注

〈1〉 同書で「認知」と訳されている語は、いわゆる「承認」である。その後フクヤマは、九・一一を経て自身も一時その陣営に属したネオコンに別れを告げ『アメリカの終わり』（原題：帰路に立つアメリカ）を著すことになる［フクヤマ 2006］。

〈2〉 中世哲学研究の泰斗エチエンヌ・ジルソンが提唱した「キリスト教哲学」に対する最初の反対者としても知られる、二〇世紀前半フランスを代表する哲学史家。

参考文献

西谷修 2000 『世界史の臨界』岩波書店
羽田正 2011 『新しい世界史へ――地球市民のための構想』岩波新書
福谷茂 2009 ［〈哲学史〉という発明］『岩波講座 哲学14 哲学史の哲学』二七–五五頁
フランシス・フクヤマ 1992 『歴史の終わり』上・下、渡部昇一訳、三笠書房（Fukuyama, Francis 1992 *The End of History and the Last Man*, New York: The Free Press）
フランシス・フクヤマ 2006 『アメリカの終わり』会田弘継訳、講談社（Fukuyama, Francis 2006 *America at the Crossroads: Democracy, Power, and the Neoconservative Legacy*, New Haven, London: Yale University Press）
G・W・F・ヘーゲル 1971 『歴史哲学』上・中・下、武市健人訳、岩波文庫（Hegel, G.W.F. 1949 *Sämtliche Werke*, hrsg. v. Hermann Glockner, Bd. 11, Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte, 3. Aufl. Stuttgart: Frommann）
G・W・F・ヘーゲル 1967 『哲学史序論』武市健人訳、岩波文庫（Hegel, G.W.F. 1833 *G.W.F. Hegel's Werke*, Bd. 13, Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie, Berlin und Leipzig: Duncker und Humbolt）
水島司 2010 『グローバル・ヒストリー入門』山川出版社